

日本では「耐え忍ぶことを美德」としていた時代もありますが、痛みが心身へ与える影響を考えると我慢することが良いとは言い難いのが実情です。無痛分娩は出産時の痛みを緩和する方法ですが、連日報道などで無痛分娩のリスクについて取り上げられていることで、「無痛分娩は危険」という印象を受けられた方も多いのではないのでしょうか。

現在報道などでもある無痛分娩とは硬膜外麻酔法での無痛分娩を示しますが、大規模な病院で行うことでリスクは自然分娩と変わらないことが示されています。しかしながら、小規模な病院または中規模・大規模な病院であっても専門の医師が複数名しかいない事でリスクが生じた場合の対応が遅れてしまう事が懸念されています。2017年4月に厚生労働省の調査班からも緊急提言が出されました。

当院では開院以来、硬膜外麻酔法のリスクに対し十分に検討した結果、硬膜外麻酔法ではない和痛分娩を推奨しております。分娩時の痛みを軽減する方法は硬膜外麻酔法とは異なります。

患者様、御家族様からの御質問も多いため、何故当院では和痛分娩を推奨しているのかにつきまして、回答させていただきます。また無痛分娩の歴史、硬膜外麻酔による無痛分娩、自然分娩、和痛分娩のメリット・デメリットにつきましても御説明させていただきます。

無痛分娩の歴史

無痛分娩は1847年にJ.Y.Simpsonがエーテル麻酔で分娩を行った事が始まりとされています。また、1853年にイギリスのヴィクトリア女王がクロロホルム麻酔で出産をしたことをきっかけに、ヨーロッパで無痛分娩（現在の和痛分娩）が広まっていきました。

1960年代にはアメリカでは、24時間体制の硬膜外麻酔による無痛分娩が開始され、希望者には無痛分娩（硬膜外麻酔）が広く行われてきました。現在も欧米での無痛分娩の普及率は高く、最も普及率の高いフランスでは、74%が無痛分娩（硬膜外麻酔）を選択し出産しています。欧米諸国で硬膜外麻酔が普及している理由として、産科医療の「集約化」がされているからです。産科医、小児科医、産科専門の麻酔科医が十分確保されている大規模な施設だからこそリスクが生じた場合であっても安全であるという事です。

日本では北里大学病院等で1980年代に硬膜外麻酔法での分娩が開始され、その後全国的に硬膜外麻酔法が行われるようになりました。

無痛分娩（硬膜外麻酔法） メリット・デメリット

無痛分娩は、麻酔薬を使って痛みを和らげながら出産する分娩方法のことで、産科医あるいは専門の知識を持った麻酔科医が行います。痛みを和らげる方法には種類があり、現在は「硬膜外麻酔法」が主流です。硬膜外麻酔による無痛分娩では、妊婦さんの背中から針を刺し、「硬膜外腔」という場所にカテーテルを入れて、その管から麻酔薬を注入する方法です。硬膜外腔の近くには、子宮や膣、会陰部などの痛みを脳に伝える神経が通っており、この部位に麻酔薬を入れることで神経を遮断するため、出産の痛みを抑えることができるのが最大の特徴です。「無痛」といっても痛みが取れない方も一定数います。心臓、血管、肺に持病のある妊婦さんや、赤ちゃんへの分娩時の負担軽減のため無痛分娩を行う方もいます。

しかしながら硬膜外麻酔による副作用やリスクについても、念頭におく必要があります。起こりやすいリスクとしては、麻酔により運動神経に影響が生じ、努責力（いきむ力）が弱くなり、分娩までに要する時間の延長が延長すること。更には医師が器具を使って赤ちゃんを引き出す鉗子分娩や吸引分娩の頻度が上がる事で、産道裂傷や分娩時出血量が増える可能性があります。また硬膜外麻酔での穿刺位置の影響により血圧低下や頭痛、下肢の運動障害、局所麻酔薬中毒などがリスクとしてはあります。勿論、これらのリスクは高率で起こる訳ではありません。

2017年4月に厚生労働省から「緊急時に対応できるよう、十分な医療体制を整えるよう求める」と緊急提言が発表されました。硬膜外麻酔法での分娩は専門性が高いため、高次医療施設での緊急対応ができる施設で行う事がより好ましいとされています。

自然分娩 メリット・デメリット

自然分娩の最大のメリットは分娩進行中に努責力（いきむ力）が損なわれないことにあります。しかしながらデメリットも多く、分娩時の痛み、痛みに伴う血圧の変動や心肺への負荷の増大、分娩後の疲労感、分娩後の疲労に伴う育児介入への遅れ等が挙げられます。

和痛分娩という選択

和痛分娩は前述のように、1853年にイギリスで、ヴィクトリア女王行った事を期に普及していきました。以降1960年代に欧米では硬膜外麻酔法が普及するまで広く行われ、日本では1980年代普及していました。1980年代に硬膜外麻酔法が出現し、和痛分娩を取り扱う施設が圧倒的に減少し、現在に至っています。

和痛分娩は自然分娩のメリットである努責力（いきむ力）を残しつつ、痛みを緩和しながら分娩させる方法です。努責力（いきむ力）が損なわれやすい硬膜外麻酔法とは異なり、吸引分娩や鉗子分娩に伴う産道裂傷のリスクも低いとされています。また、硬膜外麻酔でのデメリットとは対照的に、吸入麻酔、点滴麻酔、局所麻酔のバランスを考え、少量ずつ用いますので麻酔薬中毒等の副作用を起こす頻度が限りなく低いとされています。また、産後の疲労度が自然分娩よりも圧倒的に楽であるため、育児へのスムーズな移行が可能です。

下田医院での和痛分娩・産後ケア

当院は茅ヶ崎で開院以来52年間、和痛分娩を推奨し行って参りました。

当院の和痛分娩の特徴は①分娩時間の短縮 ②痛みの緩和 ③分娩時出血量の軽減 です。詳細につきましては、ママクラスや診察時にスタッフより御説明させて頂いております。

和痛分娩を行える施設自体が全国的に見ても少なく、施設によって使用薬剤も異なるため一概には比較できませんが、52年間和痛分娩を行ってきた当院だからこそ、皆様に御褒めしたい分娩方法です。痛みや不安を軽減し、安心かつ安全に分娩して頂ける環境を作っております。

また産後ケアにも力を入れており、助産師による母乳指導や、分娩後から育児への移行までの介助、専属の整体師による骨盤矯正、茶話会でのカウンセリング（育児への相談）も行っております。

御不明点、疑問点がございましたら、御気軽に御相談下さい。